



教員意識

一人ひとりの教員意識によって、学校や学びのあり方はどう変わっていくのでしょうか。コロナ前後に関わらず校内外で精力的に活動し続ける先生方が、オンライン座談会で語った内容から探っていきます。

取材・文／藤崎雅子

オンライン座談会

これからをつくる先生たちは何を考え、どう動いているか

座談会に参加いただいたのは、全国の多様なタイプの高校で自らさまざまな実践に取り組んでいる、教員歴15年未満の先生方4人。なぜその実践に取り組むのか、どんなことを心掛けているか、率直に語り合っていました。

——最初に自己紹介をお願いします。

伊藤 3年前、中学校教員から高校教員に転身し、教員歴は通算6年目になります。現在、工業技術系学科、普通科、国際科を設置し、進学から就職まで幅広い進路に対応している私立星翔高校に勤務しています。

上田 民間企業を経て埼玉県の教員になり10年目です。最初の学校は進学校でしたが、今年度、全くタイプの異なる川越初雁高校に移り、進路指導

や総合的な探究の時間を担当しています。

高橋 私は大学院を修了し、教員歴は6年目になります。上田先生とは逆パターンで、今年度、進路多様校から進学指導特別推進校に指定されている都立新宿高校に異動してきました。

廣瀬 新規採用で山形県立米沢興譲館高校に着任し、14年目です。本校には3年前に探究科ができ、私は昨年度から探究課長を務めています。

一斉休校で考えた、教員だからできることは何か？（高橋）



Topic 1

教員個人としての
思いは？

——では、まず一人の教員として、どのような生徒を育てたいとお考えか、お聞かせください。

廣瀬 生徒には、さまざまなことを自分ごととして考えられる人になってほしいですね。外野から批判だけするのはなく、自分が中に入ってみんなと一緒に悩んで解決策を探していく。これは生徒に求める前に、私自身がそうありたいと常々思っていることです。

上田 私は国語担当ですが、授業ではよく生徒に「幸せであるため、生存率を上げるため、リッチになるため」に国語力を付けようという話をします。「リッチ」は学校であり使わない言葉ですが、社会の構成員として働いて納税者になるのに困らない力を育てることとは大切です。そのために、社会とのつながりを意識して学べるような授業やキャリア教育に取り組んできました。

高橋 私も、身に付けたい力は社会の状況と切り離せないと思っています。これからのSociety 5.0で、競争から、

AIも含めた、共創が重要になっていくなか、授業でもそこで活きる力の育成を意識しています。こちら側でグループワークを設定するだけでなく、学習目標とともに態度目標も掲げて生徒自身が聴く（インプット）・考える・行動する（アウトプット）の3つを意識しながら学べるように工夫しています。

伊藤 生徒によく言うのは、失敗できる力は大事なことです。とりあえずやってみて、できなかったらもう1回考えたらええやんと。人は無難にいろいろしがちですが、失敗しながら前に進んでほしいと思っています。

——今年度、コロナ禍によって学校現場は大変な状況になりました。そのなかで気づいたこと、考えたことはありますか。

廣瀬 まさに伊藤先生の「失敗させる」について、それが自分たちはできていなかったと思われられる出来事がありました。今年度は文化祭も例年通りにはできないので、感染予防に配慮しながらどう実施するかは、教員が決めて生徒に伝えました。しかし、その内容に生徒たちは納得せず、ゼロか



伊藤先生のアクション



着任2年目、自ら校内研修をコーディネート

「自然に対話ができ、本音で語り合える職場にしたい」との思いで、外部研修で他校教員と共に設計したワークショップを、校内の教員対象に実施。参加者からは「本音の部分をさらけ出した」「良い職場環境につながった」などの感想があがった。

星翔高校(大阪・私立) 伊藤良平先生

苦手の数学を克服し、友人にも教えた経験が基で数学教員に。3年間の公立中学校勤務を経て、2018年より星翔高校へ。現在、3学年担任、生徒指導部副部長、ICT委員長。一斉休校中は全国の小中高生の学習を無料で支援する「オンライン寺子屋」に参画。

やっぱり対話って大事



スライドで対話の重要性を伝えたと、参加者がベアをつくり、自叙伝著者と出版社担当者の設定で取材し合うワークショップを展開。

ら考えて別の方法を提案してきたんです。ああ、今まで「生徒主体」と言いながらも、教員が設定したゴールに生徒を乗せるだけだった。失敗してもいいから生徒がチャレンジする機会を、学校が用意していなかったんだ。そこになり、今後はもっと生徒に任せていこうとわくわくしています。

上田 確かに、これまで見過ごされて

きた学校現場の問題が、コロナ禍によって表にあぶり出された感触はありますね。変わらなかった学校現場がようやく動き出した、という意味では良い流れがきたと思っています。

高橋 私が一斉休校になって最初に考えたのは、教員の役割、学校の役割って何だろう？という事です。先生が作らなくても授業動画配信サービスがあるし、自宅でも勉強できるのに学校に行く必要はあるのか。実際にその考える生徒もいるだろうと思っただけですが、いざ学校が再開したらほぼ全員が休まず登校したんです。やっぱり

生徒は学校を求めているし、教員にしかできないことがあるはずだと、強く思いました。例えば、登校時に入口で生徒の体温を測って体調チェックするのは機械にもできますが、表情から「昨日の試合で勝ったのかな」「何か元気がないな」と感じとって声掛けするのは、私たち教員だからできることなのでしょね。

——改めて、教員の役割とはどのようなものだとお考えですか。

伊藤 生徒と向き合うことでしょうか。

「この担任ができるのは自分しかない」毎日必ずクラス全員と会話 (伊藤)

実は昨年、かねてから興味のあった、全国の先生たちが学校種を超えて学び合う半年間の研修プログラムに参加したんです。そこでワークショップ開発のグループワークに取り組み、対話によつていかに自分の考えが深まりチームワークが発揮できるかを実感しました。そのときふと浮かんだのが、自分は担任として生徒と十分に対話ができているだろうかということ。以後、毎日クラス全員と話すことを自分に課し、名簿に印をつけて漏れないようにしな



高橋先生のアクション

企業を取材し社会を考えるPBL型キャリア学習を企画

前任校の2学年総合的な学習の時間のなかで、大学生と中期的に連携し、生徒が「記者」となって企業を取材し発表する「高校生記者」を実施。キャリア意識の向上やSDGsの観点で社会・世界を知ることがねらい。活動前は専門学校や就職を考えていた生徒でも、大学生と共に活動するなかで大学進学を選択肢として考え始めるケースも多い。



海洋プラスチックゴミ対策に取り組む企業を訪問(写真左)。SDGs推進企業の担当者に直接インタビュー(写真右)。

新宿高校(東京・都立) 高橋伸明先生

大学院在学時に学校臨床実習を行った都立田柄高校に2015年度着任。「高校生記者」の実践で19年に「がんばれ先生!東京新聞教育賞」を受賞、同年東京教師道場修了。20年度都立新宿高校へ異動。学校外では、東京都高等学校国語教育研究会研究部員、東京都アクティブ・ラーニング型授業研究会事務局役員をはじめ、キャリア教育やSDGs、PBLやNIEなど多数の研究會や研修でも活躍。

がら、休み時間にもクラスに行つて話をするようにしています。教科の授業は他の人に代替できたとしても、このクラスの担任は自分にはしかできない、という思いで取り組んでいます。

上田 私は、教員は「媒介者」だと考えています。世の中には、私が教えられること以上に、素晴らしい情報や教材がたくさんあります。それらを、目の前の生徒たちの現状を把握し、的確な情報を良いタイミングで投げ、ときには学校外の人や物とつなげながら生徒を伸ばしていくことこそ、教員が力を発揮するところ。教科でも、探究でも、教員が「てこ」となることで生徒の学びをより大きくできるのではないのでしょうか。

互いの良さを認め合う 教員集団を見て、生徒も育つ学校へ

(廣瀬)

高橋 これからは教科以外のところで自分のテーマをもって、「プラスα」に取り組んでいく必要があるのではないのでしょうか。私にとつてのプラスαとは、SDGsを通して、私たちの生きる社会はこうなっているのだと課題も含めて伝えていくことだと考えています。そのためにも教員である自分自身も常にアンテナを高く張って、知識や情報をアップデートし続けたいと思っています。

廣瀬 私はよく生徒に、「教師という仕事はやればやるほど深まる。選んで良かった」と話します。授業にしても完成形はなく、昨年度の指導案を出してきてその通りにやろうとしても、一年前と同じ熱量ではできません。この一年間で自分がアップデートしてきたことを反映させて「絶対面白いぜ！」と思えることをして、初めて生徒を引き込むことができます。そのために、学校の枠にとらわれず、どんどん外に出て学んでいきたいですね。



Topic 2 同僚に対して 大切にしていることは？

——同僚の先生方と共に何かに取り

組むとき、どんなことを大切にしていますか。

伊藤 先ほど生徒との対話を心掛けていると言いましたが、対話は教員間でも大切にしたいと思っています。しかし、本校は教科別の職員室になっていて、他教科の先生とはなかなか話す機会がありません。そこで昨年度、外部の研修プログラムで考案した対話のワークショップを先生方向けに開催しました。勤続2年目の若輩者が言い出すのは勇気がいりましたが、先輩に相談したら「面白いやん、やろうや」と背中を押され、校長先生の賛同も得て行うことになったんです。自由参加でしたが二十数名が集まり、予想以上に先生同士が心を開いて話し合いを認め合えた様子でした。これをきっかけに対話を促す活動は今後も続けていきたいですね。

高橋 私は新しい取組を始めるとき、「自分じゃないとできないこと」をしていきたいのですが、同時に「自分がいなくなっても持続可能」にしないと意味がないとも思っています。前任校では、総合的な学習の時間の一部として

廣瀬先生のアクション



まず自分が校外で学び 学校に持ち帰る

若手・中堅向け進路勉強会、授業力向上セミナー、主体的な学びのための問いづくりセミナーなど、積極的にさまざまな外部研修に出掛けて学んでいる。学んだことを自分自身が実践のなかに試行錯誤しながら落とし込み、さらに、実践してみて学校全体に必要なと思った内容は、校内研修を実施して他の教員と共有している。

外部講師なしで廣瀬先生が実施した「探究×キャリア教育」について職員会で理解を深めるための研修。知っていることを教えるのではなく、生徒の力をどのように伸ばしていくのかを考えることを目指したという。



米沢興譲館高校(山形・県立) 廣瀬辰平先生

教えるのが好きだったことと、高校時代が楽しく職場にしたいと思ったことから高校教員に。2年間の講師を経て07年度に新規採用となり、米沢興譲館高校に着任。16～18年度は進路指導主事を務める。18年度同校に探究科が設置され、19年度から探究課長、および進路指導課副主任に。

「高校生記者」という企業取材を通して将来を考えるキャリア学習を立ち上げ、毎年、大学生ボランティアと連携して実施していました。参加生徒はロールモデルを発見したり、取材やブレゼンをして自信がついたりといった効果があって、私が異動した後は他の先生が受け継いで続けてくださっています。マニュアルさえあれば続くわけではなく、なぜこれをやるのかという活動の意義を周囲の先生方に伝え、情熱をもって自分が働きかけてきたことで、

持続可能な取組になったと思っています。

上田 私は当初、やりたい企画がなかなか通らなくて苦労しました。民間企業でやってきたように論理的に説明しても受け入れられず、「なぜわかってくれないの?」といら立ったことも……。でも、あるとき、「私と意見は違っても、どの先生も生徒の成長に資することをしたいと思っている仲間なんだ」と気づいたんです。今、周囲にはこちらの企画にすすんで乗ってくださいる先生方ば

教員が外に「発信」していくことで 情報と仲間が集まってくる

(上田)



上田先生のアクション

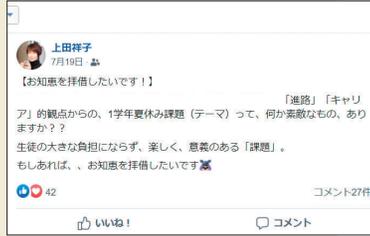


SNSでアイデア募集 企業人提案の新企画誕生

1学年進路からの夏休みの課題は「『ありがとう』をデザインする」。上田先生がSNSで広く意見を募り、商社勤務の知人が提案した。幸せにしたい3人を設定して「ありがとう」と言ってもらえることを計画して実行し、気づいたことを振り返るというPDCAを通じて、自分自身を知るのがねらい。

川越初雁高校(埼玉・県立) 上田祥子先生

不動産開発営業、専業主婦を経て、出産を機に教育の重要性を改めて痛感したことから2011年度より埼玉県立高校教員。JICA教師海外研修参加経験も活かしSDGsを取り入れた授業を実践。20年度より県立川越初雁高校勤務。進路指導部。一般社団法人の理事を務めるほか、企業の新人研修や女性のキャリアデザインを考える会など多方面で活動。



上田先生は日常的に教員としての問題意識や取組をSNSで発信している。夏休み前は「進路・キャリアの観点からの1学年夏休み課題、何か素敵なものありますか?お知らせを拝借したいです」といった内容を投稿。

かりです。それは、先生方へのリスペクトをもつて行動するように、自分自身が変化したからかもしれません。廣瀬 本校では探究を軸にした新しい学校づくりに、全校体制で取り組んでいます。これまで取り組んだことのない先生も少なくないなか、探究課長としては、地道に探究についてみんなを理解を深めていくしかないと思っています。どの先生も何か持ち味にしてい



学校外とつながる意味とは?

ることや、がんばっていることがありません。そこに目を向けて、尊敬し合う教員集団になる。そして、それを問近で見ると、生徒もお互いを尊敬し合うようになる。そんな学校が私の理想です。

先生方が目指す生徒を育てていくにあたって、学校外との関係性についてはどうお考えでしょうか。

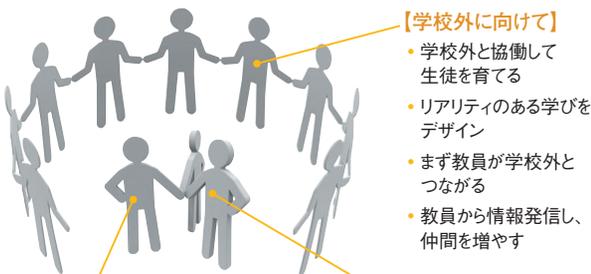
伊藤 家族と教員以外の大人と関わり、多様な価値観に触れる機会も必要だと考えています。それで昨年度、「産業社会と人間」の担当として、企業が出す課題に取り組むプログラムを導入しました。

高橋 自分は学生時代、教室での講義以上に、社会人の話やボランティア活動から学んだことが多かったと感じています。ですから、もし教員になったら生徒を社会とつなげる活動をしたいたずつと思っていました。先ほどお話しした「高校生記者」を始めたのも、そういう思いがあったからです。リアリティが学びを大きくするという信念のもと、企業や大学を実際に訪問することで、人はもちろん施設や空気感など、あらゆるものから学んでほしいと思つて取り組みました。

Summary

4人が語った“これから”の教員像

座談会の議論からは下記のようなキーワードが浮かび上がりました。そのベースには、先生方の多様な個性を活かしながら、生徒の成長を主体的、協力的に支え、協働していこうという思いがうかがえます。さて、それでは皆さんの場合は…? これからの学校をつくっていく当事者として何を大切にしていけるか、同僚と対話してみたいかがでしょうか。



【学校外に向けて】

- 学校外と協働して生徒を育てる
リアリティのある学びをデザイン
まず教員が学校外とつながる
教員から情報発信し、仲間を増やす

【個人として】

- 生徒にどんな力を育てたいかを明確にもつ
“人”にしかできないことに注力
目の前の生徒の現状把握をベースに
社会と生徒を媒介する
教科指導プラスαをもつ
常に自身をアップデート

【同僚に向けて】

- 教員同士の対話を心掛ける
相手に対するリスペクトを忘れない
取組の趣旨や熱意を伝える
コミュニケーションを諦めない

廣瀬 皆さんと同じように、多様な考え方・生き方の大人との出会いのなかで社会を生きていく力を身につけてほしいといった考えから、本校では近くの山形大学や市役所などと連携して探究学習を実施しています。そうした学びを推進していくには、我々教員こそ、もつと外とつながっていく必要があると思っています。

今年度の夏休み、進路指導部から1年生に「『ありがとう』をデザインする」という課題を出したんですが、これは私がSNSでアイデアを募って、ある商社社員が提案してくださったテーマなんです。課題の解説動画にも、生徒への応援メッセージを寄せていただきました。例年がない学事日程のドタバタのなか自分一人では決してできなかった、生徒の未来に資すると確信できる実践が生まれた。これこそ、「私は何のためにいるのか」という自身への問いへの答えかもしれない、と思つたものです。

—— 本日はありがとうございました。